No. 18
1991. 12

図書館だより

上田女子短期大学附属図書館

読書事情・今昔 そして一冊の本

竹内　要

先ごろ、学生生活についての全国大学生協連合会による調査結果を知る機会があった。そこの最近10年間の生活費の移り変わりをみると、住居費、交通費、食費などの項目が増えているなかで、一つだけ書籍代が減っているのである。理由は、近年本が安くなったというのではなく、学生が本を読まなくなったからだというのである。そこで実際に学生の読書時間をみると、1日の平均読書時間は、10年前には約1時間だったのが、1990年は37分という。 これを、もう少し具体的にみると「読書時間はほとんどない」学生が34%と全学生の3分の1以上、1年生では40%を占めている。本は読むものであるから、読まなければいらないということになるのだろうか。「本を全く買わない」という学生も30%になっている。3分の1に近い学生が本を買わないということになる。

こうみると、学生生活も大きく変わってきていることがわかる。本を買わない学生もさることながら、実際に周りを見ると本の扱いも大きい変りようである。

テキスト、参考書らしい本がしばしば教室に忘れられて置かれている。いかにも寂しい感じであるが、それが時にはいつまでも放置されていることもある。持主の名前が書いてない場合が多いから本人が気づかなければどうしようもない。学生として、学習するには教科書がなければ困るのではなかろうか。学習に必要な教科

目　次

・読書事情・今昔 そして一冊の本 …… 竹内　要…1
・諸悪の根源としての学問…… 坂野　信彦…4
・文学青年だった頃…… 山本　秀麿…6
・『桜の園』のことなど…… 久保田園実…8
・夢いっぱいの図書館…… 片山美弥子…10
・児童文化研究大会に参加して…… 田中　東…11
・私にとっての図書館…… 井原七緒子…12
・本の影響…… 田辺　和子…13
・【図書館ガイド】…… 14

書の扱いでもこのような状態もあるのである。

このことは、物が豊かな時代で出版物にも恵まれて育ったからという理由だけではないように思われる。本、書物に対する感覚、態度とでもいうものが大きく変わってきているようにも感じられる。本を両手に持っておしいただき、ページを開いて読書を始めるほどではないにしても、本はその辺の足元に置くものではないとしたしつけはあった。したがって本の扱いもていねいで汚したり傷つけたりしないような心くばりもなされてきた。それは紙に印刷された物品というよりは、学問、知識、芸術、文化の具現体として尊重されたとも言うことができる。古風な話で、今日のように書物は紙をとじた物としている世代にとっては、化石時代と笑われるかも知れないが。

そのついでに、もう一つむかしばなしを。それは、本を買うために早朝から行列をつくって並んで本屋の開くのを待った時代もあったということである。某書店発行の新刊、再刊などの売り出す日には、社会人、学生があちこちの書店前の街頭に並んだのであった。今、その当時の本を開くと紙質も極端に悪く、文字も不鮮明で読み続けるのも大変なほどである。うそのような本当にあった話で、第２次大戦後の活字文化の飢餓的状況のなかでのことである。

読書の周辺的なことを書いてみたが、やっぱり、それでもここで一冊を紹介したい。

その一冊とは、神谷美恵子著「こころの旅」（1974年、日本評論社）である。著者が没した後、「神谷美恵子著作集３」として1982年みすず書房から刊行され現在18刷を数えており、すでに読んだ人もいると思う。あるいは同じ著者による「生きがいについて」（1966年、みすず書房）や「人間をみつめて」（1974年、朝日新聞社）などの方が一般的で多く読まれているかも知れないが、よりこの書をすすめたいので紹介する。しかし、これだけでは関心がもう少しという向きもあるのでニュースにこじつける。

秋篠宮家に内親王が誕生「眞子」と命名されたが、そのニュースの前にさかのぼる。母親となられた紀子さんとの関連である。記憶に誤りがなければ、「こころの旅」は、紀子さんの愛読書が何かとして名前のあがった本である。そんな興味からでも手にするのもよいだろう。

「こころの旅」は、Ｂ６判232ページという手ごろな本で、全10章にわたり「『人間性探究のため』といった気持ちから（中略）精神医学以外に生理学、心理学、文学、哲学、宗教など手あたりしだいとりくむことになってしまった。（中略）乳幼児、児童、青年、壮年、老年各期ごとにそれぞれ各方面から研究が深められているのに、一生ぜんたいを俯瞰する（以下略）」（あとがき）というもので最近注目されている生涯発達心理学的な特徴ある一書として、その先頭を切ったものと思われる。もっとも著者は、精神科医としてらい療養所（長島愛生園）に勤務後、大学教授（津田塾）で1979年没、したがって「心理学」に限定的にみない方がよい。

各章は、発達段階的にまとめられ、親しみやすい見出しの中に人間科学全般の広い視野に立った柔軟性のある暖かい見解が提示されている。

「第一章人生への出発」の中に「人生とは生きる本人にとって何よりもまずこころの旅なのである。」として「精神医学の前提としての人のこころの旅路をたどって行きたい。」とする。そして「人生への出発点を受胎の瞬間とみなすべき」として「その生の出発点から自分にも他人にも気づかれない。人生は発端からして人間の意識を超え、同じく終末も意識のまどろみの中で迎えるようにできているらしい。」という。

子どもの発達に関して「人が育つということ、生きるということは、周囲から切りはなして考えることはできない。とりわけ育つということは育てる者のあり方と密接に関係している。それで妊娠の初めのころ、初めての胎児の存在を自覚した母親のこころからまず見て行きたい。」として、胎生期、妊婦の心理から筆を起こしている。

第二章以下の標題を追ってみると、第二章人間らしさの獲得、とし「立って歩く」「言葉を使う」を「革命」とし、フロイト、エリクソン、

ピアジェなどの諸説にふれ「人間らしさが着々準備されていくあとを具体的に」たどっている。

第三章三つ子の魂、第四章ホモ・ディスケンス、第五章人間性の開花、第六号人生本番への関所、と続く。ここでは「配偶者の選択」として「理想を語り夢みるのもいいが、結婚は恋愛とちがい、現実との対決であり、かなり平凡な日常生活のつみかさねというきびしい面がある。これは結婚に社会性という側面がそなわっていることによるとともに、自己と相手の現実に初めてなまのかたちでぶつかり、両者を日々融和させなくてはならないためであろう。愛というものが現実というテストでためされるわけである。」とある。

第七章はたらきざかり、第八章人生の秋、第九章病について、第十章旅の終り、にでは「老いのこころ」「死について」「旅をかえりみて」とあり、「人間のこころはある範囲の中ならばおどろくほどの可塑性と適応性を持っている。」とあり「どんな一生を送ってきた人でも、人生の終りに過去のこころの旅をみはるかすとき、こころというものの変幻自在なふしぎさに感嘆しないではいられないはずである。」とし「からだにとって空気や水や食物が必要なのと同様にこころには生きるよろこびが必要であることは一生を通じて変らないことであった。」という。

引用が冗漫、断片的だが、人間の一生にわたっているので、どこからでも興味関心のあるところを開き一読のきっかけになれば、と思い取り上げてみた。なお、今回はふれなかったが、読書は「図書館」でもできるので念のため。

（教授）

本年度受入の視聴覚資料

〔ＬＤ〕

- 敦　煌
- モ　モ
- コーラスライン
- ポリスアカデミー５
- ビバリーヒルズコップ
- レインマン
- Ｅ・Ｔ
- ルーブル美術館
- ツイン・ピークス
- グレムリン
- スノーマン
- ハチ公物語
- ブーニン東京コンサート
- クラック木を植えた男
- アルプスの少女ハイジ
- 赤毛のアン
- ベイビートーク
- アニー
- サウンド・オブ・ミュージック
- ウォータームーン
- カクテル

〔ビデオテープ〕

- ＮＨＫ特集　桂離宮
- ＮＨＫ特集　夏服の少女たち～ヒロシマ昭和20年８月６日～
- 手ぶくろを買いに　・ごんぎつね

〔ＣＤ〕

- アカペラⅡ　……　タイムフェイブ
- 音楽畑５　……　服部克久
- テレビの中に　……　ＫＡＮ
- ヤンシベリウス歌曲集
- ビゼー　ラロ歌曲集
- レーヴェ歌曲集　　他

毎年学生の皆さんの希望も取り入れ収集していますが、予算等の問題からすべてに応える事は困難です。所蔵している資料を有効に利用しましょう。

諸悪の根源としての学問

坂　野　信　彦

こんにち、学問は権威主義の最後の砦となろうとしている。

いまや学問こそ、人間の最大の敵である。

＊

わたしたちは、いまもむかしも信仰の世界に生きている。かつてわたしたちは、わたしたち自身の生活を実験の場として、実体験に即した知識を集積し、伝承してきた。伝承は信仰として受け容れられたが、同時にそれは新たな伝承の叩き台ともなった。わたしたちは信仰しつつ学問していたのである。

ところが、いま、わたしたちはみずから学問することを放棄してしまっている。学問は、現代社会の中心的な制度として確立している。それは、法律とならぶ強力な規範として、ひとびとの思考や行動を規定している。学問は、市民社会の王として君臨し、わたしたちを統御しているのである。わたしたちは、権威ある学問にただ従うばかりである。学問に歯向かう権利をわたしたちは持っていないようである。

わたしたちが学問に盲従するのは、ただただ学問の権威のゆえである。学問の権威を絶対的なものとみなしているので、それに逆らうことができないのである。ここに、わたしたちの権威主義が生まれ育つ。正しいか正しくないかの判断認識をまったく行わずに、権威に頼って学説を鵜呑みにしてしまうのである。権威だけを信頼する。これを権威主義と呼ばずして何と呼ぼう。

現代社会に生きているわたしたちは、こうして学問を通じて権威主義を身につけてゆく。学校という教育制度がその権威主義をいっそう助長する。わたしたちひとりひとりの精神は、学問という制度によっていやおうなく権威主義に染めあげられる。個人個人の精神にとって、このことのもたらす悪影響ははかりしれぬものがあろう。

人は言うだろう。学問は専門的だし厳密なものなのだから、一般のひとびとはそれをただ無条件に受け容れてよいのではないか、と。そうなのである。まさにそう思わせるところにこそ、学問というものの狡猾さがある。じっさいには、ほとんどの学問はそれほど専門的でもないし、それほど厳密なものでもない。専門的といっても、門外漢に手のとどかないような学問領域など、そうめったにあるものではない。厳密といっても、だれがどうみても絶対に正しいというような学説など、そうざらにあるものではない。

わたし個人の経験からみると、権威のある学者の多くは誤っていることが多い。なぜそうなのかという理由はここでは述べない。ただそれが学界における権威主義とふかく結びついているということだけを指摘しておく。ともかく、権威をともなう学説の多くは信用できない。

また人は言うだろう。学問はつねに真理へむかって着実に進歩しつつある、と。その時どきでもっとも進んだ学説が提出されているのだから、それを信用するほかない、と。だが、わたしに言わせればそれも間違っている。学問はかならずしも進歩ばかりしているわけではない。それどころか、逆にどんどん後退してゆく例もすくなくないのである。進歩しつつあるようにみえて、じつはとんでもない方向へ迷い込んでしまっている――そういう正統派の研究はけっしてめずらしくない。

その典型的な例を、栄養学にみることができる。栄養学といえば、わたしたちの日常生活にもっとも身近かにかかわる学問分野である。栄養学は、第一次大戦が終わったころ、まずヨーロッパにおいて誤った方向へ向きを変えた。日

本の栄養学は、第二次大戦後に、まったく誤った方向に転換した。この方向転換は、現在もなお是正されていない。いま、日本の児童のじつに98%が動脈硬化をきたしているという。動脈硬化といえば、かつてはもっぱら壮年期以降の人の患う成人病とされていた。この異常事態をもたらした最大の元凶こそ、まさしく栄養学にほかなるまい。

栄養学の推奨する食事メニューは、端的にいって、造病食である。肉や牛乳や玉子や魚を高く評価し、白米や白パンや白砂糖や食塩を容認する栄養学者。その栄養学者に忠実な栄養士。だが、じつは肉や牛乳や玉子や魚は、成人病、癌、アレルギー疾患等の強力な素因となる。白米や白パンや白砂糖や食塩は、いちじるしく栄養のバランスをくずし、代謝異常をもたらして万病のもとをつくる。学校給食も病院食も、ひたすらこうした造病食を強制する。食品産業も図に乗って劣悪食品を売りまくる。こうして、病人と半病人の満ちあふれる病気天国日本ができあがるのである。

栄養学という権威が、食事についてのわたしたちの正常な判断力を狂わせてしまった。赤信号はみんなで渡れば怖くないかもしれないが、造病食はみんなで食べても怖いのである。栄養学など存在しないほうがよかった。民間に伝承されていた知識だけのほうがどれだけよかったことか。もう取り返しようもない。

正統的な栄養学者や栄養士の言うことはほとんど信用に値しない。食事に関する医者の忠告も同様である。――それなら、いったいだれを信用すればよいのか。信頼すべきものなどあるのだろうか。

ない、としたら絶望的だ。が、世の中そう捨てたものではない。世の中は広い。いろいろなひとがいて、いろいろなことをしている。栄養学にかぎってみても、じつにさまざまな立場からさまざまな研究がなされ、成果が発表されている。それらがふだん人目にふれないのは、ただそれらに権威がともなっていないからにすぎない。ほんとうにすぐれた学説は、えてして人目にふれないものである。

では、どうしたらそのすぐれた学説に接することができるのか。――これが一番の問題である。この拙文の主眼もここにある。

すぐれた学説は、わたしたち自身がさぐり当てなければならない。判断の拠りどころとなるのは、ほかでもないわたしたち自身のもつ判断力である。そのゆえに、わたしたちはつね日ごろからみずからの判断力に磨きをかけておかなければならない。そうして、できるだけひろく諸説を渉猟しなければならない。そのさいには、研究者の地位や学歴、本の体裁や出版社名などまったく意に介さない心構えが必要である。見かけ上のものにすこしでも判断を左右されるようでは、権威主義からの脱却はおぼつかない。俗説、旧説、珍説、奇説……にもひろく目をむけよう。そうしたもののなかからも、ほんものすぐれた見解をさぐり当てることができるはずである。

ひろく諸説を渉猟するうえで便利なのが書店と図書館である。ただし書店は昔の本をあまり置いていないし、お金を出して買わなければゆっくり読めない。やはり図書館が一番である。

信頼できる知識は、むこうからやってくるものではない。だれかが教えてくれるわけでもない。信頼できる知識を得るには、わたしたちひとりひとりが主体的に学問しなければならないのである。学問という権威主義の砦を突き破る方途は、そこにしかないだろう。

（教授）

文学青年だった頃

山本秀麿

私の実家は戦前・戦後の暫く旅館をしていた。

風光明媚、四季の変化に富む山ノ内温泉郷には、文人墨客の絶えることがない。

敗戦色が濃くなった頃、家の2階に、小説家の林芙美子が疎開して来た。物不足の時代に、林さんから紙や鉛筆をいただいた記憶がある。村の子供達と一緒に、面白い話をせがんだこともあった。私が小学校に入学して間もなくの頃のことである。

林芙美子は『夢一夜』という短篇小説の中で、

この日の婦人会の集会は、山の上の尼寺であった。ここでも、同じような顔ぶれが集る。

子供連れの老女がのろのろと雪道を尼寺へ登って行く。菊子もねんねこ半纏で子をおぶい、むつきの袋をさげて出かけるのだ。点呼があるので休むわけにはいかなかった。皆の顔がそろうと村長婦人の号令がかかる。宮城ようはい。傷痍軍人戦没勇士に礼拝をする。子供をおぶっている女達は背中が重いのでよろけながら立っている。村長夫人はあたたかい感じの女であった。なりふりかまわない身なりで、肥った体で恥ずかしそうに号令をかけた。村長夫人は、きまって戦場で夫を亡くした未亡人や母の手紙を朗読して聞かせてくれた。とつとつとした夫人の柔い朗読は、時に涙を誘われるような文面もあった……。

と書いている。この中の村長夫人とは、私の母のことである。「なりふりかまわない身なりで肥った体で恥ずかしそうに……」とは、まったくその通りで、よく言い当てている。今は亡き母を思い出す文章があるとすれば、『夢一夜』を除けば他にない。それにしても、女流小説家の観察眼と表現力に恐れ入るばかりだ。

高校時代は演劇に熱中した。モリエールの『守銭奴』やゴーゴリの『検察官』の主役を演ずる。またチェーホフの『桜の園』の老僕も演じたことがある。

この頃、夏になると角間温泉に滞在して、仕事をしていた武田泰淳が、親類の越後屋旅館が混んでくると、家の2階で小説を書いていた。北海道塘路で構想をねった『森と湖のまつり』である。仕事に疲れるとウィスキーを飲み、隣の私の勉強部屋に顔を出す。そんな時、はずかしくもなく、『守銭奴』のアルパゴンを演じてみせた。昔のことでどんな感想であったか忘れてしまったが。

私が大学に入ってからも、毎年こられた。長兄ともどもお酒のお相手にもなった。夏が終り、東京に帰られる時には決って、沢山の文学全集を下さった。そんなわけで、何時のまにか、小説に興味を持ち、同人誌『蔦』を創刊したりした。後にも先にも、これ一冊のみであったが。

兄や私の話の中からヒントを得て、武田泰淳は『敵の秘密』を創作した。これは昭和30年8月発行の雑誌『別冊文芸春秋』に発表したものである。

＜アンゴラ兎を飼う気持＞となると、私自身についても、これをうまく説明するのが容易でない。私がひまさえあれば四六時ちゅう、箱の中の兎の生態をジッと見つめていると、父はよく＜いいかげんにやめればよい＞とたしなめたものだ。村長までつとめた父は人格者、絵も書も精妙な学者肌で、なかなか多趣味であった。小鳥も飼い、盆栽も集め、楽焼のかまどまで築いた男だ。その父にして私があまりに兎に熱中すると＜すこし頭がおかしくなったんでねえか＞と注意した。これに対しては、私は常に微笑と無言を以て応えるより致し方なかった。……村の共同湯へ行くさい、父は私を冬のどてらの下へおぶって通った。父の肌にジカに暖められて

運ばれるわけだ。

文中の私自身は長兄のことである。慶応大学を卒業しながら、戦後は農業とアンゴラ兎を飼育していた変り種である。隠者のような生活ぶりに、泰淳さんが不思議がるのは無理もなかった。現在も晴耕雨読の生活をしている。「村の共同湯へ行く……」この部分は私が話した通りに書いてある。

武田夫人は女優かと思うほどの美しい人である。夫の没後、富士山麓での生活を記した『富士日記』で田村俊子賞を受賞。『犬が星見た－ロシア旅行』で読売文学賞を受賞する。昭和26年に生まれたひとり娘花子さんの子守をしたことがある。夫人に似て愛くるしかった。成人してからは、会ったこともないが、朝日新聞紙上で、彼女のエッセイを読んだことがある。両親の血を受けてなかなかのものだ。あの頃を思い出す新聞記事がある。『北信ローカル新聞』の芹沢珠枝記者の昭和63年8月12日号に「角間温泉と作家武田百合子さん、夫の故泰淳と滞在」の取材記事がそれだ。

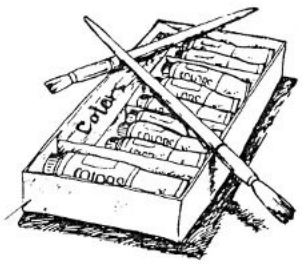
武田からは文章についての指導は受けたことはございません。ただ物を見る目が培われたといえば、やはり30年近い武田との生活で自然に身についたものと思います。……山ノ内町角間温泉の越後屋さんにお世話になり始めたのは確か24、25年頃からだったと思います。しばらくは武田も旅館の2階で仕事をしましたが、湯治客が大勢来たりして落ち着かないものですから、近くの山本さんの家の2階を借りることになったんです。毎年夏行く度に、奥様の心遣いでしょうか、青々としたゴザが敷いてあり、床の間には清楚なお花が飾られ、きれいに拭いた机が置かれていたのを今でも思い出しますね。武田は執筆中は誰も部屋に入れず、私も仕事中は出来るだけ行かない様にしていました。……当時山本さんはアンゴラ兎を沢山飼っておられ、武田の作品の中にもこの事が書かれているんです。

……そうそう楽しい事もありました。越後屋さんの前の広場で盆踊りがあった時、地元の方は皆さんおとなしい人達ばかりで、そんな中雰囲気を盛り上げるため秀麿さんが女装して踊って下さったのです。娘が大変喜びましてね……。時々写真を眺めては、当時の事を思い出し、この間も一時共に過ごした友人と角間の話をしたばかりなんですよ。

記者は懐かしい思い出をまるで昨日の事の様に話される夫人の記憶力に感心したと結んでいる。

私が大学に入学した年の昭和30年『文学界』の第一回新人賞に一橋大学4年生の石原慎太郎の小説『太陽の季節』が受賞した。主人公が高校生であること、作家が大学生であることにショックを受けた。原稿用紙とペンがあれば有名になれる。そんな短絡的思考から『文学界』へ投稿を試みた。結果は見事に落選。『太陽の季節』も賛否両論。戦後のあだ花となった。

(助教授)



『桜の園』のことなど

久保田　園　実

学生の頃、クラスの友人の家におじゃましたとき、その友人のお母さんに「園実さんという名前、どなたかチェーホフを好きな方がつけられたの？」と聞かれておどろいたことがありました。私の名前は、男の子の名前しか考えていなかった父が、生まれたのが体重だけ男の子なみの女の子だったので、手取り早く日頃愛読しているチェーホフの戯曲からとったものでしたから…　聞けばそのお母さんも、チェーホフのファンとのことでした。

父は学生の頃からチェーホフに親しんでいましたから、父の本棚には大正15年出版の部厚い『チェーホフ書簡集』をはじめとして、チェーホフの本がいつも置いてありました。そんな関係で、文学に疎い私も、他の作家よりは拾い読みの機会があったようです。もちろんそこから名前をいただいた『桜の園』を読んだのはいうまでもありません。

日本人のチェーホフ好きということはよくいわれることですが、なかでも『桜の園』は最もポピュラーな作品といえるのではないでしょうか。それは多分この戯曲の悲劇的な面が日本人の好みに合っているからでしょう。ご承知のように、この戯曲は広大な領地『桜の園』が、その地主であるラネーフスカヤ夫人から離れて、かつてはその領地の農奴の息子であったロパーヒンに買い取られるまでの半年ほどの話です。地主貴族のラネーフスカヤ夫人とその兄ガーエフのふたりが、たとえ軽薄で無能であったとしても、旧き良き時代をなつかしみながら、しかし現実には何ひとつ有効な手だてを打てぬままわが家を追われるようにして出ていかなくてはならなくなる結末は、やはり亡びるものの悲哀が胸を打ちます。ところがチェーホフはこの戯曲の標題に「喜劇」と書いています。日本人と限らず、『桜の園』を喜劇として受けとめる観客はまずまれでしょう。

この戯曲を作者がなぜ喜劇と呼んだのかという問題は、チェーホフについて書かれる場合にしばしば取りあげられる問題です。いえ、そもそもの初演のときから、劇団側はこれを悲劇として受けとり、喜劇だといいはっているチェーホフと論争しています。この劇を最初に上演した芸術座の演出家スタニスラフスキーは「あなたは喜劇といいますが、普通の人たちにはこれはこれは悲劇なのです」とチェーホフに書いています。チェーホフはこの戯曲を書きあげてから10ケ月ほどで亡くなるのですが、それまでに見解が一致した様子はありません。

話は少しわき道に外れるのですが、私にはチェーホフという人が、内心ひじょうに冷たい部分、いいかえれば科学者的な冷厳さをもっていた人ではないかと思われるのです。彼は決して少なくない小説や戯曲の作品のなかでほとんど自己を語っていませんし、4,200通あまりの書簡のなかでも、肝心なことについては本心をさらけ出してはいないように思われます。前述の喜劇の問題もそうですが、たとえば彼の寿命を縮めたというシベリヤ経由のサハリン行きにしても、その動機についていまだにはっきりしないことなどです。それをチェーホフの謙虚さと評者はいいますが、私にはその辺がいまひとつ彼に親しみを感じられない点でもあるのです。

ところで私が『桜の園』を舞台でみたのは、今から20年くらい前のことです。演出　宇野重吉、ラネーフスカヤ　細川ちか子、ガーエフ　清水将夫、ロパーヒン　滝沢　修、娘のアーニヤ　真野響子、万年大学生トロフィーモフ　米倉斉加年など、いま思えばたいへん豪華な配役でした。写実的で重厚な舞台装置とあいまって

幕開けから終演まで、まさしく演劇的時間と空間の中に漂っていた気がします。5年ぶりペパリから領地の屋敷に帰ってきたラネーフスカヤ夫人を迎える始まりから、桜の樹が伐られる音に追われるように旅立つまで、戯曲は全体に下降していく雰囲気の中で進んでいきますが、その中でただ娘のアーニャだけは、蕾がだんだん開くように輝いていきます。万年大学生トロフィーホフが熱っぽく説く未来の社会が、アーニャの目にもしだいに見えてくる。今はベテラン女優の真野響子が、そのときがデビューの初舞台だったのです。彼女が笑うと舞台全体が明るくなるような、本当に清純でいきいきしたアーニャでした。トロフィーモフがいいます。「ロシア全体がわれわれの庭なのだ。大地は広くて、美しい、そこには素晴らしい場所がいっぱいある。」アーニャは『桜の園』への愛着をうすめていきます。

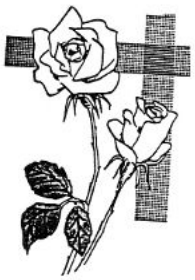
幕切れ近くで、屋敷を出るまぎわに、ガーエフとラネーフスカヤ夫人の兄妹が抱き合い、声を忍ばせて泣くシーンに、外からアーニャが呼ぶ「ママー！」という明るい声が重なります。チェーホフはこの没落のドラマに、未来への希望を託したひと粒の種としてアーニャをしのばせたのでしょうか？

チェーホフがこの戯曲を完成したのは1903年それから10数年してロシア革命が起りました。社会主義国だったソ連では、チェーホフは新しい社会の到来を予感していた進歩的作家であるというのが定評のようでした。チェーホフが改革派とどうかかわっていたかということは私にはわかりませんが、あの大きな変革が、ロシア国内はもちろん、他の世界の国々に大きな影響を与えたことは確かです。理想の社会という夢を抱いて、どれだけのアーニャとトロフィーモフが生まれたことでしょう。そして、国によっては戦争で死ぬのと同じように、その夢のために死ななければならなかった人たちが少なからずいたということ……。

わたしには、社会が広範囲に、たいへんな勢いで渦を巻いて唸っているものですから、何が何なのかわからないのですが、ソ連は今また大変革の波にもまれていると聞きます。失業者はすでに1千万人を超え、農産物の生産は落ちこみ、輸送、貯蔵などの流通手段は半ばマヒとのことです。「さようなら」と旧い家を出て、おそらくは社会建設の先頭を進んでいたに違いないアーニャやトロフィーモフたちはどうしているのでしょう？　没落の悲劇は再びくり返して演じられているのでしょうか……。そこまで想いを廻らしてきたとき、ふっとチェーホフの声が聞こえたのです。――悲劇ではありません。喜劇です。――

（疑問、あなたは恋をしたことがあるか？）

（講師）



本学の先生の近刊書

（1990. 10～1991. 10）

新出近世俳人書簡集　矢羽　勝幸著

和泉書院　1991　10,300円

元禄の森川許六から幕末の峯村白斎まで江戸時代の著名な俳人75名の未発表書簡を127通、ほとんど写真版をそえて翻刻、くわしい注解説を施したもの。中には小林一茶の書簡4通、加賀の千代女、『北越雪譜』の著者鈴木牧之宛ての諸国俳人からの来翰など珍しいものが多い。高岡市の俳誌「くらげ」に4年間ほど連載したものに、新たに20通ほど追加、編集しなおしたもの。俳人の遺墨集としても楽しめる一冊。限定出版500部。

夢いっぱいの図書館

幼児教育科　1年　片　山　美弥子

私は、初めて附属図書館に入った時から、多くの夢や希望で心がいっぱいになりました。

どうしてこんなに私の心をふくらませたのかというと、この附属図書館には、様々な分野の本が数多くあり、絵本などの児童書、紙芝居もあります。そして、小学校や中学校、高校にはなかったカセットやＣＤ、ビデオの視聴コーナーもあり、コンピュータ化されて様々な面で利用でき心が広く豊かになれると思ったからです。

私は、小学生の頃はよく図書館を利用していました。しかし、中学生、高校生になるにつれて、図書館へ足を運ぶことが少なくなり、同時に本を読む冊数が、ずいぶん減ってしまいました。本を沢山読む人は、多くの知識をもち、そして何よりも、心が豊かで人間的に温かいと思います。なので私も、もっと本を読んで、いろいろなものを得たいと思いました。

そのような気持ちから、短大生になって初めて借りた、『みどりのゆび』、モーソス・ドリュオン作、安東次男訳の感想を述べたいと思います。

チトと呼ばれているこの男の子の本当の名前は、フランソワ＝バチストといいます。その理由は、周りの大人たちが、本当の名前を忘れてしまったために、チトと呼ばれるようになったのです。チトの父親は鉄砲を作る大きな工場をしていて、母親は花のようにやさしい人です。家も立派で、チトはとてもお金持ちの子供なのです。チトは普通の人のように学校に行ったのですが、どうしてもいねむりをしてしまい、学校をやめさせられてしまいました。なので父親が、庭で土の授業をさせることに決めました。その方がチトにも楽しそうでした。この事がきっかけで自分にみどりの指がある事を知ったのです。この指で触るとみんな美しい花にかわるのです。いろいろな種が風にのっていろんな所についているからどこでも花になるのです。私は、現実にはありえない夢のある考え方が大好きです。チトは、「病気の少女に花を与えればベットでの生活は楽しく希望がもてる」と、とても純粋な考えをもっています。チトのできることは夢のまた夢だけど、私にはありえないみどりのゆびの代わりのものを自分自身の中から見つけ、純粋で心が広く豊かなやさしい気持ちをもち続けたいと思いました。

私は、今まで以上に本のすばらしさを知り、夢いっぱいの図書館を利用できることがとてもうれしいです。私の夢は、大好きな音楽を生かし、どんなときも笑顔で思いやりのある心温かい保育者になることです。その私の夢をかなえてくれるひとつのものは、この夢いっぱいの図書館です。大切にしていきたいと思いました。

【ニュース】

オンライン検索サービス開始

本学図書館では、先頃、コンピュータを使ったデータ検索のために、各種ネットワークに加入し、オンライン検索のサービスを開始しました。一つは、ＡＳＡＨＩパソコンネットによる各新聞記事データベースの検索で、朝日、毎日、読売、日経等の総合誌、及び図書情報や、音楽ＣＤ総合カタログ等のデータが検索可能です。

もう一つは「国文学研究資料館」との接続によるマイクロ資料等のオンライン検索です。詳しい利用方法、料金については図書館にお訪ね下さい。

児童文化研究大会に参加して

幼児教育科　2年　田　中　　東

第14回児童文化研究大会で、京都大学の藤本浩之輔先生の講演とそれぞれの分科会に分かれての研究会がありました。両方とも専門職を希望している私にとっては勉強になりました。

藤本先生の講演は「子どもがつくる文化」でした。文化とは、一つの社会の子どもたちによって習得され、維持され、伝達されている生活様式のことだと先生はおっしゃっていました。生活の中から遊びが生まれ、そしてパターン化されそれが子ども自身の文化になっていきます。「よもぎ」の話も、百年以上も前から同じ石灯籠の台座の穴で昔と変わりなく遊びが続いていると聞いて驚きました。その他にも、言語や身体等に結びついたお話がありました。最後には、文化的環境は子どもに影響を与えるということで、「子どもたちが作り出した文化を尊重する」ということがとても大切なことだということが分かりました。最後に言われた言葉を忘れないで保育の場で生かしていきたいです。

分科会では「ほめられることもつらいな！」で附属幼稚園の先生方の発表を聞きました。子どもをほめることはとても難かしいことです。私も実習をしている時にほめることって難かしいと思いました。発表者の意見を聞いて思ったことは、私も3人姉妹の長女なのでいつも「お姉さんでしょ。」と言われ、発表者と同じ思いをしたことを覚えています。ほめ方にもいろいろとあって、私はどのほめ方がいいのかは分かりませんでした。しかし、子どもにとって保育者の一言は、とても大きな影響を与えるということが分かりました。何でもほめるのではなく、子どもにとって、困難、苦痛等を乗り越える力となるようなほめ方を心がけたいと思いました。ほめ方とは、保育をする者にとって答えの出ない問題だと思います。心の中にいつもこの問題を置いておきながら保育していきたいです。

貸出図書ベスト20（1991. 4～1991. 11）

1	みだれ髪全釈　改訂版	逸見久美　著
2	明日があるなら（上）	シドニイ・シェルダン　著　天馬龍行　他訳
3	無印結婚物語	群ようこ　著
4	N、P	吉本ばなな　著
5	明日があるなら（下）	シドニイ・シェルダン　著　天馬龍行　他訳
6	愛される理由	二谷友里恵　著
7	片恋がステキ	みつはしちかこ　著
8	シュガータイム	小川洋子　著
9	妊娠カレンダー	小川洋子　著
10	恋愛論	柴門ふみ　著
11	文学部唯野教授	筒井康隆　著
12	白い手	椎名　誠　著
13	パイナップリン	吉来ばなな　著
14	哀しい予感	吉本ばなな　著
15	大学生のアン　上	L、Mモンゴメリー　著
16	後宮小説	酒見賢一　著
17	アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス　著、小尾芙佐　訳
18	風葬の教室	山田詠美　著
19	源氏物語の女	若城希伊子　著
20	白河夜船	吉本ばなな　著

私にとっての図書館

国文科　1年　井　原　七緒子

「やさしい司書の先生がいる」「今度は何を読もうかな」――そんな気持ちから私は小学校の時、とてもよく図書館を利用したものでした。転校した上田の小学校の担任の先生が図書館利用に熱心だったことも、私を図書館好きにした要因の一つだったのかもしれません。その頃は書名を書いて、はんこを押してもらうカードがありました。それが2枚目、3枚目と増えていくと、カードの上に色がつくのです。赤や黄色や青……。それを友達と競うように本を借りたりした思い出があります。

そして今、私はもうやさしい司書の先生がいなくても、自分で図書を選択して読書のできる年齢になりました。とはいうものの、私が今読んでいる本の多くは、ベストセラーになったものや、友達が読んで「面白かったよ」というようなものばかり。主体性がないのです。我ながら情なく思い、短大の合格が決まり、受験勉強から解放されたのを期に、文学作品などにも少しずつですが手を伸ばし始めました。小学校の頃には難しくて読めなかった本も今なら少しですが理解できるようになったから……。

短大に入学して初めて附属図書館に足をふみ入れて、私は一種のカルチャーショック（と言って良いかわかりませんが）に陥りました。CDを聴いたり、ビデオまで観ることができるなんて……。私が今まで考えていた"図書館"という概念が見事に崩されたのです。小学校を卒業すると、私は図書館というものをあまり利用しなくなってしまったので、なおさら「図書館」という所は本しかない所だ――という固定観念が出来上がってしまっていたのです。この図書館では、図書を利用して学習・研究するだけでなく、空き時間を有意義に過ごす工夫までなされていたのです。これは私にとって、とても新鮮な驚きでした。さらに、貸出・返却が全部バーコードでコンピュータ処理されていることにも感心しました。これなら、私が少し遠ざかっていた図書館との距離をまた縮めることができそうです。

私にとっての図書館の基本はやはりあの小学校の時のほのぼのとした司書の先生との関係や、純粋に読みたい本を選ぶ場所――ということです。でも時代が変わって、今は小学校のあの図書館も変わってしまったかな、とふと思います。機械化が悪いという訳ではありませんが、私の大好きな場所だったあの図書館の雰囲気だけは、いつまでも子供達に引き継いでいって欲しいと思うのです。機械と人の心が同居する――そんな図書館がこれから出来ていけばいいな、と思っています。

本の影響

国文科　2年　田　辺　和　子

夏休みに、書店で1冊の絵本を見つけた。幼少のころ大好きだった絵本だ。懐かしくなって思わず手に取って開いてみた。

何だか不思議な感じがした。一文字一文字を追うごとに、この絵本を読んだ時のことが思い出される。床に足を投げ出して、イスに腰かけて、或いは父の膝の中で、絵本を開いている感触が頭に浮かぶ気がする。

探してみたら、あと2冊思い出の絵本が見つかった。どの絵本もストーリーや挿絵にドキドキして、どのページにもそういう「感触」が感じられた。ともすると、ストーリーや挿絵より「感触」の思い出の方が鮮明なものもある。熱中して読んだ本だから、「ドキドキ」や「感触」が残るのだろう。よく、本は主人公を自分に置き換えて様々な体験ができる。と言われるが、これら三冊の絵本も私にとってそうだったのだと思う。私自身がうさぎさんやカラスになって、困ってみたり活躍してみたり、そんな風に熱中している間の、フッと緊張が途切れた時にイスの上や父の膝の中の感触が気持ちよかったのかもしれない。

私は小学校、中学校、高校時代のいずれにも毎晩眠る前にほとんど必ず本を読んでいた。と言っても、世間一般にいわれる文学作品は読まない。物語や小説、エッセイなどの気に入っている作品を、何度も何度も繰り返して読んだ。本を読まないと落ち着いて眠れない夜もあった。眠る前の一冊は、私にとって一種の子守唄のようなものかもしれない。

気に入っている本は何度読んでも飽きない。読む毎に好きになっていく本もある。今までに何度も読んだ本のはずなのに、突然ある一文が抜きんでて好きになったり感心したりする表現を見つけると、その表現にあやかるように枕元に置いて眠りたくなってしまう。

これらの大好きな本や、眠る前に読んでいた本の数々を、10年後、20年後に読み返すと、今年の夏休みのように不思議な感じがするかもしれない。

スーパーつよしくん

国文科二年　重山　幸子

ボクはスーパーつよしくん
こわいものなんかありゃしない
いつもは普通の男の子だけど
本当はとても強いんだ

きのう公園に
たかおザウルスが現れたんだ
ボクは変身して
スーパーつよしくんになった

ボクのビームで
公園には
また平和がやってきた

ママ
ボクもう夜一人で
オシッコ行けるよ

【図書館ガイド】

図書館利用調査について

本学図書館は独立図書館移転後、平成2年度をもって満10年を迎えました。1981年独立図書館移転後、全学にアンケートを実施し、運営の参考としましたが、本年は以後10年目の節目になりましたので、最近の学生の図書館への意識、考え方等を調査してみることにしました。以下、アンケートは、全学実施が困難のため、幼児教育科、国文科2年生の一部に実施、結果は、両科の人員にバラツキがあるため、パーセントで示しました。

利用調査結果

調査人員　幼教科 159名
国文科　75名

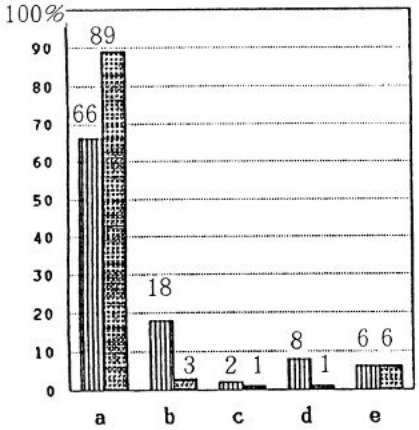
1. あなたは図書館の印象についてどう思いますか。

	幼	国		幼	国
使いやすい	73	73	使いにくい	27	27
落ち着いている	85	89	落ち着かない	15	11
静か	93	82	さわがしい	7	18

〔考察〕

問1. 図書館の印象は、前回と同様であるが、「使いやすい」「静か」が、わずかながら増加している。

2. どのような目的で図書館を利用しますか。

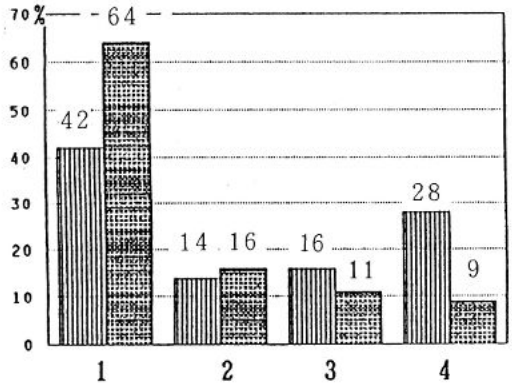


a. 授業レポートの課題等の調査のため
b. 教養趣味のため
c. 新聞・雑誌を読むため、または閲覧のみ
d. AV資料の利用のため
e. その他ひまつぶし・友達との待ち合わせ・電車待ち

幼児教育科
国文科

問2. 利用目的のaは、著しく増加、（幼教前回は46%）国文科の高率は科の性格にも因ろう。cの激減（前回b＝36%、c＝9%）は、その要求充足方法の変移に因ると考えられる。（dとの関連もあろうか）eは不変

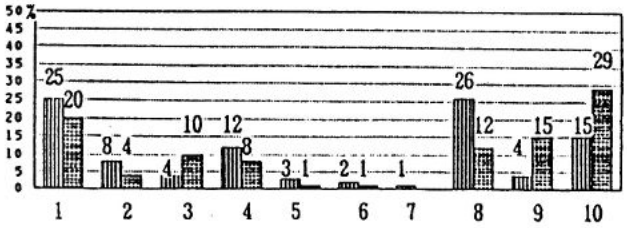
3. 図書館に増やしてほしいと思う図書はどのようなものですか。



(a) 用途からみて

1. 講義・研究等に関連した専門書
2. 一般教養のための図書
3. 社会生活全般の実用書
4. その他

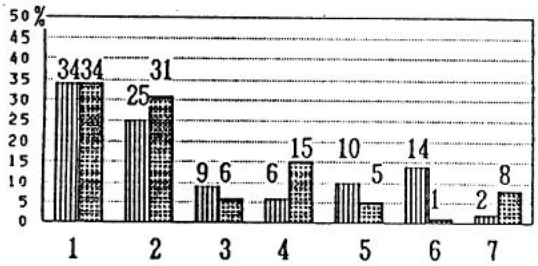
(b) 領域・分野別にみると次のどれですか



問 3. (a)は、前項2問との関連が読み取れようか。(b)では幼教は、パーセントにおいて、前回とほぼ同様の傾向を示しているが、「文学」の激減は、2問のb及び3問の(b)とも関連しようか。3問(b)幼教科の「芸術・・」、国文科の「語学・日本語・・」の高率は各科の性格との関連がうかがえる。
（尚、「一般」の高率は、領域分野の区分をＮＤＣによったが「総記」という名称が難解かと考えられたので、「一般」としたため、いわゆる一般教養書と受け取られたのであろうか）

1. 一般　2.哲学・心理学・倫理学・宗教　3.歴史・伝記・地理・紀行
4.社会科学・政治・法律・経済・社会・教育・民俗
5.自然科学・数学・化学・医学　6.技術・工業・家政学
7.産業・農林業・水産・商業・交通　8.芸術・美術・音楽・演劇・体育・娯楽
9.語学・日本語・英仏独語　10. 文学

4. 図書以外の資料等で増やしてほしいと思うものは次のうちのどれですか。



1.ＣＤ
2.ビデオ
3.テープ（カセットテープ）
4.ＬＤ
5.楽譜
6.紙しばい
7.コンピュータソフト
ワープロソフト

問 4. 時代、メディアの変遷、専攻分野等との関連が現れている。

5. 図書館で書架案内や図書の探し方、利用法文献検索等の質問をしたことがありますか。

	幼	国		幼	国
ある	6	26	ない	94	74

あると答えた人は役にたちましたか。

	幼	国
よく理解できた	40	25
まあまあ役にたった	50	75
理解できなかった	10	0

問 5. レファレンスの必要がない程に理解されているのであればよいが、意欲の欠如であっては困る。求める者には得るところがあるといえようか。

6. 現在の図書の貸出などについてどう思いますか。

貸出・返却手続き

	幼	国
簡単	60	57
普通	32	41
面倒	8	2

貸出期間

	幼	国
長い		3
適当	83	87
短い	17	10

貸出冊数

	幼	国
多い		1
適当	85	80
少ない	15	19

問 6. 貸出、返却手続きは、前回に比して「簡単」が著しく増加、「普通」（前回70%）との逆転になったのは、コンピュータ導入の意義が大であることをうかがわせる。
貸出期間は「適当」が増(前回70%)、貸出冊数は「少ない」が、増加（前回６%）

7. 図書以外の資料の貸出等についてどう思いますか。

貸出・返却手続き

	幼	国
簡単	25	15
普通	54	67
面倒	21	18

貸出期間

	幼	国
長い	1	
適当	79	83
短い	20	17

貸出点数

	幼	国
多い	2	
適当	78	80
少ない	20	20

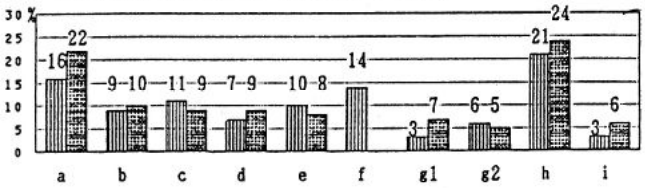
問 7. 今回新設の設問事項、結果表のとおり。

8.　オリエンテーション時（入学直後）のガイダンスはよく理解できましたか。

	幼	国
理解できた	20	21
まあまあである	69	71
理解できなかった	11	7

問8.　オリエンテーションは、「理解できた」が増加（前回17%）

9.　図書館の施設、設備，利用等についての要望で次の中から希望する項目を３つ選んで下さい。



a. トイレの設置　b. ロッカーの増設　c. グループ研究室の設置
d. 図書館のスペースをもっと広く　e. ブラウジングルームをもっと広く明るく
f. 視聴覚設備の充実　g. 開館時間の延長 1. 平日　2. 土曜
h. コピー料金の値下げ　i. コンピュータの検索を各自できるよう開放

問9. 施設、設備面で、前回最高の「冷房」は、1988年に解決、aは前回２位、bは学生の生活様式等の変化（携行物等）とも関連か。C、dは増加、今回新出のeはfとともに、さらにの改善の希望である。利用面のgの要望は、前回より約半減である。今回までの間の改善の成果かと思われる。hは激増、時代を反映。iは早期実現をめざしたい。

前回の調査は1981年で、この10年間の当館の歩み、それらに関連深い事項の主なものとしては、国文科開設（1983）、コース制導入（1987）、司書課程開設（1987）、冷房設備完備（1988）、図書館業務コンピュータ化（1990）等が挙げられる。考察に前回調査結果及び、これら諸事項との関連を考え合わせてみるに、概ね当図書館は、利用者には好意的に受け止められていることが伺える。利用規則等も一部改善の要望はあるものの、大部分の利用者には現状肯定者が多く、利用状況も、他大学と比較してもかなり高い利用率を示し、関係者としても一安心というところである。

以上、結果を踏まえて、一層の充実発展に努めたい。　（山口）

編　集　後　記

東西対立の解消即世界平和の到来と喜ぶ間もなく中東湾岸戦争、続くソ連邦体制の崩壊と混乱等々世紀的重要事件が続々と報ぜられ、グローバルな世界の行くてをシステム的に考え行動するのに便利ではあったが、判断主体となる人々の自主的自己形成とすぐれた情報処理能力の啓発、その役を担う図書館の重要性の再認識の年でもあったがそれももう暮れようとしている。

この時、図書館だよりを企画したところ諸先生の玉稿ならびに学生諸君の寄稿をいただきここにたより第18号を得ました。本館の発展を念じつつ皆様の一層のお力添えをお願いします。（清水）

上田女子短期大学　図書館だより　第18号　1991. 12発行
編　集　上田女子短期大学図書委員会
発　行　上田女子短期大学附属図書館
〒386－12　長野県上田市下之郷620
（TEL 0268－38－2352）